The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベルクソン『物質と知覚』における「私の知覚」の形成段階について ： 二章のヴァリアントとの比較を通じて
Author(s)	天野, 恵美理
Citation	メタフュシカ. 2015, 46, p. 19-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54519
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベルクソン『物質と知覚』における「私の知覚」の形成段階について
――二章のヴァリアントとの比較を通じて――

天野恵美理

はじめに

『物質と記憶』（以下 MM）[1] 第一章には、次のように述べられている。「事実上は、諸記憶に浸されていない知覚はない。我々は、我々の感官の直接的で現在的な所与に、我々の過去の経験のたくさんの詳細を混ぜ込ませている」（MM30）。こうした知覚は、「私の諸記憶が水増しをしている…私の知覚」（MM31）と言われる。MM 一章の主題であり、一冊の書物としての MM の基盤たるべき純粋知覚とは、記憶力（mémoire）による知覚へのこのような寄与を取り除いた純粋状態における知覚のことであるから、「私の知覚」がどのようにして形成されるものであるのかを把握すること、つまり、諸記憶による「水増し」とはいかなるものであるのかを把握することは、MM の読解において決定的な重要性をもつ。ところが、本稿を通じて示すことになるように、「私の知覚」がまず形成される局面は、MM の出版の数ヶ月前に発表された MM 二章のヴァリアントである雑誌論文「記憶力と再認」（以下 MR）――ベルクソン研究において殆ど注目されていないが――から、MM にかけて、新たに画定されたものなのである。そこで本稿においては、「私の知覚」の形成についての MR から MM にかけての変更を辿りつつ、「私の知覚」がまず形成される段階の内実を明らかにしていくことを試みる。

以下に本稿の構成を示す。

まず 1 節において、MR においても MM においても共通する、以下の諸事項を確認する。すなわち、記憶力には、「運動的記憶力」と「純粋記憶力」との二種類があること（1.1）、そして、現在の状況との関係における、記憶力の働きである「再認」においては、我々が現在の印象の有益性を追究するかそれを断念するかに従って、「自動的再認」と「注意的再認」との二種類が区別されること（1.2）、さらに「自動的再認」のうちでも、「判明な知覚」の形成が有益であるか否かに従って二通りのものが見分けられるということ（1.3）である。

---

[1] MM の引用は *Matière et mémoire*, Presses Universitaires de France., 2008. による。

次いで 2 節において、MR から MM にかけて、「判明な知覚」が形成される局面の重要性が決定的に増し、この局面が「私の知覚」が形成される局面として積極的に規定されるようになったことを、まず自動的再認について（2.1）、次いで注意的再認及び再認一般について（2.2）、示していく。

最後に、MR から MM にかけてこのように「私の知覚」の形成段階が画定されたことから示唆される MM 読解の方向性を示す。

１．二種類の記憶力、二種類の再認、二種類の「自動的再認」

１．１　二種類の記憶力

MR においても MM においても、ベルクソンは、「運動的記憶力」と「純粋記憶力」という二種類の記憶力を認めている。「運動的記憶力」とは、反復を通じて、身体の運動習慣ないし運動メカニズムというかたちで過去を記録するに至らしめ（cf. MR / MM89[2]）、またそのメカニズムを働かせる記憶力のことである。一方、「純粋記憶力」とは、「我々の日常生活のすべての出来事を、それらが展開するにつれて」（MR / MM86）取りこぼしなく蓄え、またそれらを働かせる記憶力のことである。

例えば、暗記課題の暗唱において、二種類の記憶力を見分けることが出来る。すなわち、「覚え込まれたかぎりでの課題の記憶」（MR / MM84）と、「例えば二回目とか三回目とかの特定の朗読の記憶」（ibid.）とである。前者のかたちでの記憶の獲得・再生は主に運動的記憶力に担われているし、後者のかたちでの記憶の蓄積・再生は主に純粋記憶力に担われている。

なお、運動的記憶力と純粋記憶力との関係性に関して、「覚え込まれたかぎりでの課題の記憶」のような、「習得された記憶」（MR / MM88）――「習慣的記憶」（MR / MM91）と呼ばれる――の獲得と再生については、それぞれ次のように言われる。まず、習慣的記憶を獲得する過程においては、目立って働いているのは運動的記憶力の方であるにしても、純粋記憶力によって蓄えられた過去の諸記憶の「潜伏的介入（intervention latente）」（ibid.）が認められる。

> 例えば、私がある暗記課題を習得する訓練をしているとき、私が諸運動によって再編成しようとしている視覚的ないし聴覚的なイメージは、すでに我々の精神のうちに、不可視的ながらも現前している…。最初に暗唱するときから、我々は、あたかも意識の薄暗い深淵から（des obscures profondeurs de la conscience）一種の警告を受けるかのように、ある漠然たる不安の感情でもって、いま犯したばかりの誤りを認める。（MR / MM92）

その一方、いったん課題が暗記されたのであれば、「運動的記憶力に叩き込まれた課題は自動的に反復される」（MR / MM91）。暗記課題に限らず習慣的記憶の再生についてはこのように、「メカニズムはいったん形成されるとそれ自体で機能することができる」（MR / MM92）とされる。

---

[2] 以下、/ で区切って MR / MM とした上で MM の頁数を記してあるものは MR と MM とに共通の記述である。MR にのみ見られる記述を引用する際は *Revue philosophique* の 1896 年 3 月号と 4 月号における頁数を記した。

純粋記憶力によって蓄えられる過去の諸記憶が「人称的な」（MR / MM94 et passim）ものであるのに対して、このようなわけで、「習得された記憶は、ますます非人称的になるし、我々の過去の生とはますます縁遠くなる」（MR / MM88）。習慣的記憶のこうした自律的な働き方は、「自動運動（automatisme）」（MR / MM91 et passim）と呼ばれる。

１．２　二種類の再認

二種類の記憶力の概略については以上の通りであるが、次に「再認」について見ていく。再認とは、「我々がそれによって過去を現在のうちで再び捉えるところの具体的行為」（MM96、強調引用者）のことである。純粋記憶力の働きが関わっているにしても、現在の状況と無関係な記憶が夢のような仕方で浮かんでくるという事態は、再認ではない。また運動的記憶力の働きが関わっているにしても、「運動的記憶力に叩き込まれた暗記課題」が、現在の状況とは無関係に、それ自体で「自動的に反復される」という事態も、再認ではない。再認とは要するに、現在の状況との関係における、記憶力の働きなのである。

再認には、「自動的再認」と「注意的再認」との二種類があるとされる（cf. MM107）が、二種類の再認の区別を考えるにあたって、まず前提となるのは、次の事実である。すなわち、「我々は、我々の神経系の構成からして、我々のところで現在の諸印象が適切な諸運動にまで引き延ばされるような存在である」（MR / MM103-4）ということである。「現在の諸印象」は「感覚的印象」（MR / MM102）とも呼ばれ、これは現前する対象の印象のことである。「適切な諸運動」というのは、現前する対象が「我々の側に」まず引き起こすものであって、これは、「それによって我々がその対象に適応するところの、少なくとも生まれかけの諸運動」のことである（cf. MR / MM89）。要するに、我々が受ける、現前する対象の感覚的印象は、適切な、したがって有益な、身体的反作用へと引き継がれる傾向をもっている、ということである。そしてこうした事態は、「我々の神経系の構成からして」そのように定まっているとされる。我々の神経系は、「非常に多様な知覚器官が、すべて、中枢を介して同じ運動器官に結ばれている」という「その構造」からして、「不安定（instable）」で「多彩をきわめたニュアンスをもちうる」ものである「感覚」を前にして、「いったん出来上がった」「運動メカニズム」を「不変的に同じ仕方で」機能させるという、実践的な「用途」をもつ（cf. MM178）。それゆえにこそ、感覚がいかに不安定で、また多様なニュアンスをもっていようとも、そこから「同じ有益な諸効果」（ibid.）が引き出されることが出来るのである。このようなわけで、「我々の神経系の構成からして」、現前する対象の感覚的印象は、我々の神経系においてすでに作り上げられている運動メカニズムを通じて、有益な身体的反作用へと引き継がれる傾向をもつと言えるのである。

その上で、現在の印象が有益な身体的反作用へと引き継がれることへと向かうこの傾向に、我々が沿っていき、現前する対象を利用するという有益な反作用でもってその対象に応じて、その対象から結果的に「有益な効果を引き出す」（MR / MM107）のか、あるいは、我々が件の傾向に抗して、つまり現在の印象の「有益な効果を追い求める」（MR / MM110）という「実践的な目的」（MR / MM107）をあきらめて、現前する対象のもとに留まり、そうして現前する対象に対して

ますます深まる認識をなすのか、にしたがって、「自動的再認」と「注意的再認」という二種類の再認が区別される。それゆえ、我々の神経系の構成からしてすでに認められるものであった「少なくとも生まれかけの諸運動」については、「自動的再認」においては、この運動は有益な反作用として実際に開花することになると言えるし、「注意的再認」においては、この運動は「生まれかけ」のままで留められると言える（cf. MR / MM110）。なお、純粋記憶力と運動的記憶力という二種類の記憶力に関して言えば、「注意的再認」における、対象についてのますます深まる認識は、純粋記憶力によって蓄えられた個別的な諸記憶を対象の方へと投射することによるとされるため、「注意的再認」においては純粋記憶力の方が目立って働いていると言えるであろうし、一方、「自動的再認」においてはこうした個別的諸記憶の投射は見られず、運動メカニズムの機能が認められるのであって、運動的記憶力の方が目立って働いていると言えるだろう。

１．３　二種類の「自動的再認」

以下では、「自動的再認」のうちでもさらに、「判明な知覚」の形成が、達成されるべき身体的反作用の見地からみて有益である場合とそうでない場合とで、二通りのものが見分けられることを確認していく。

さて、自動的再認とは、現在の印象が有益な身体的反作用へと引き継がれることへと向かうという件の傾向が、結果として実現されるような再認なのであった。そこで自動的再認においては、「感覚的印象とそれを利用する運動とのあいだの連結」（MR / MM102）のメカニズムは、「形成された」（ibid.）ものとして認められるということになる。「形成されたメカニズム」を「形成途上のメカニズム」から区別するものは、「先行する諸運動における、後続する諸運動の前駆形成」（ibid.）である。以上を踏まえた上で、ベルクソンが自動的再認の例として挙げる、新しい町に馴染んでいく過程を示した例（MR / MM100-1）を見てみよう。この町の例においては、①メカニズムが未だ形成されていない状態（つまり自動的再認がなされていない状態）と、②そこにおいて「判明な知覚」の形成が有益であるような「自動的再認」と、③そこにおいては「判明な知覚」の形成が無用であるような「自動的再認」との、三つのケースが見出されるのである。

まず、「私が初めての町を歩く」場合、「私は街角ごとに、どこに行くのか分からなくてためらう」。私はこのように「確信が持てない」のであるが、これはつまり、「諸々の選択肢が私の身体に対して提起されており、私の運動はその総体において非連続的であり、諸態度のうちのひとつの態度のうちに、来るべき諸態度を告げ知らせ準備するものは何もない」ということである。したがってこの場合、上で述べた、「感覚的印象とそれを利用する運動とのあいだの連結」のメカニズムは、未だ形成されていないと言える。（上記①）[3]

次に、上記のメカニズムが形成されている場合、すなわち「自動的再認」が起こっている場合における二通りのものを逐次見ていこう。

---

[3] この段階においてもすでに、目の前にあるものを「町」や「道」として認めるという一般的なレベルでの再認はなされているのであるが、ここでは自動的再認における二通りのものを見極めるために、新しい町に次第に馴染んでいく過程に焦点をあてて自動的再認を考察することとする。

「町に長く住んだ後では、私はその町を、私がその前を通り過ぎる諸対象の判明な知覚をもつことなしに、機械的に歩き回るであろう」。この状態においては、「私は、私の自動運動しかもはやほとんど意識しない」。ここでは、「付随する運動」がすでに「習慣」（cf. MR / MM91）へと組織されており、運動メカニズムが「確固たる（stable）」（cf. ibid.）ものであるがゆえに、私がその前を通り過ぎる諸対象の漠然とした感覚的印象だけ認められれば、運動メカニズムが「それ自体で機能することができる」ということである。だからこの場合、それら諸対象に対して判明な知覚をもつメリットがなく、それら諸対象の「判明な知覚」は「無用（inutile）」とされるわけである。（上記③）

また、初めて町を歩く場合から、上記のような極端な状態に至るまでのあいだには、次のようなすぐれて認知的な条件が「中間的条件」として認められる。「中間的条件」においては、「付随する運動」そのものは、先の極端な場合ほどには組織されておらず、つまりそれ自体で機械的に進行するのではないのであって、この「中間的条件」において対象が引き起こす諸運動は「互いにコントロールしあう」とされる。先の極端な場合とは異なり、この場合における「付随する運動」には、分節化の余地があるというわけである。ここで、「対象が互いにコントロールしあう諸運動を引き起こす」という事態をより詳しく見ていくと、それは次のようなものであるだろう。まず、我々が感覚的印象を受けるとともに、我々の側に生まれかけの反作用が引き起こされる。ここでの生まれかけの反作用は、過去の経験（この場合は幾度かその町を歩いた経験）ゆえにある程度は組織されているものの、それ自体で機能するものではない。そこで、この生まれかけの反作用が対象の側へとフィードバックされることで、対象の輪郭がかたどられ、漠然とした感覚的印象でしかなかった知覚が「強調」（MR / MM101）[4] ないし「補完」（MR / MM107）[5] されるのであり、つまりは「判明な知覚」が形成される。なお、生まれかけの反作用でもって対象の輪郭が描かれるという事態は、対象の「図式」が描かれることとも言われる（cf. MR / MM106, 107）。そしてこうして判明となった知覚においてはじめて対象を利用する方向性が見て取られるのであって、この判明な知覚が、今度は、実際に外的対象に対してなされる有益な身体的反作用へと引き継がれる、というわけである[6]。このように、この「中間的条件」における「付随する運動」に関しては、感覚的印象→生まれかけの反作用のフィードバックによる判明な知覚の形成→判明な知覚を利用して実際になされる有益な反作用、という三つのステップが見分けられるのである。（上記②）

自動的再認において認められる二通りについては以上の通りであり、付随する運動が確立された「自動運動」としてそれ自体で機械的に機能するのでない場合（②）もまた、自動的再認とされているのである。なお、②の場合も③の場合も、自動的再認である以上、いずれの場合におい

---

4 「中間においては…生まれかけの自動運動によって強調される知覚があった」（MR / MM101）。

5 「対象の図式を描こうとする運動傾向によってそれに対する視覚的知覚を補完する習慣」（MR / MM107）。

6 生まれかけの反作用が対象の側へとフィードバックされるという段階では、外的対象に対して、物理的な作用としては何も返されていないということに注意しよう。cf. 石井敏夫、『ベルクソンの記憶力理論――『物質と記憶』における精神と物質の存在証明――』、理想社、2001、77 頁。

ても、感覚的印象は結果的には有益な反作用へと引き継がれることになる[7]。

以下、2 節では、MM においては我々の知覚は、②の条件において認められるような仕方で、生まれかけの反作用によって多少とも判明化されるものとして、一般的に規定されるようになったということ、そして、こうして多少とも判明な知覚がまず形成される局面が、「私の知覚」が形成される局面として、再認一般において画定されるようになったということを示していく。

２．MM における、判明な知覚が形成される局面の重要性

２．１　自動的再認に関して

2.1 においては、まず自動的再認について、MR から MM にかけて、前記の③の条件においてとりわけ顕著に認められるものであった自動運動、すなわち機械的な反作用が背景化し、②の条件においてその有用性が際立っていたところの「判明な知覚」が形成されていく局面が決定的に重要性を増して[8]、この局面が一般的なものとして規定されるようになったということを示す。

まず、MR から MM にかけて機械的な反作用が背景化したことを示すものとして、次の二点が挙げられる。第一に、MR において自動的再認の例として、上述の町の例の二段落後に置かれていた以下の例が、MM においては消去されているということである。

> 例えば職業上よく会うことになる人物たちを前にして、あなた方に何が起こっているかを分析してみたまえ。言葉はあなたの口へと機械的にやって来るし、あなた方はまた、ある態度をやはり機械的に採用する。…印象が新しいときにこれらの反作用が不確かで、漠然としており、非連続的であって、反対に、いったん人物が知られているのならば、反作用は定められており（décidé）組織されているのであるなら、我々の再認の感情はまず、我々の身体的態度においてある、強化された（consolidé）ものと、一致するはずではないだろうか。（MR238）

この例においても、町の例と同様に、初めての知覚の場面と、その後の知覚の場面とが対比されているのであるが、一見して明らかなように、町の例において②と③のあいだに認められた微妙な区別はもはや設けられていない。つまりここでは、印象が新しい場合と、ある定まった有益な反作用を現に機械的にとる場合とが対比されているのであって、実際になされる有益な反作用へと向かう局面において、生まれかけの反作用が感覚的印象を判明化するという事態は注目されて

7　自動的再認の障害（「方向感覚の喪失」（MR / MM105）等、知覚が有益な反作用によって引き継がれるということが出来ないケース）について、「問題となっているのは、運動的諸習慣の単なる倒錯かあるいは少なくともそれらを感覚的諸知覚と結ぶ絆の遮断である」（ibid.、強調引用者）とされる。前者においては③が、後者においては②が、それぞれ念頭に置かれていると言える。次の記述についても事情は同様である。「通常の対象を用いることができるということは、…ある態度をとることかあるいは少なくとも…その傾向をもつことである」（MR / MM101、強調引用者）。

8　逆に言うと、MR においては、有益な反作用として現に「ある態度をとること」――③において顕著に認められる――と、「その傾向をもつこと」――②において顕著に認められる――とが、いずれも有益な反作用へと方向付けられているものであるということにおいて、つまりはいずれも「自動的再認」において認められる事態であるということにおいて、はっきりと区別されることなく一括りにされていたと言える。

いない。以上の例が MR から MM にかけて段落ごと消去されているのである。

機械的な反作用の背景化を示すもう一つの根拠は、MM 三章において、生まれかけの反作用の局面が差し挟まれる余地のない、まったく機械的な再認が、「事実上は決して到達されることのない…極限」（MM187）、「人間においては…存在しない」（ibid.）状態として、厳格に規定されたということである[9]。まったく機械的な再認、すなわち、「刺激に対して、それを引き延ばすものである直接的反作用によって反応すること」は、MM においては、「下等動物の特性である」（MM170）とされる。これは逆に言えば、我々人間のなす自動的再認においては――たとえ住み慣れた町を機械的に歩き回っている場合でも――、感覚的印象と有益な反作用とは、直接的に接続されることはなく、両者のあいだには、生まれかけの反作用がつねに差し挟まれているということである[10]。

次いで、自動運動の背景化のみならず、MM においては、生まれかけの反作用によって感覚的印象はつねに多少とも判明化され、多少とも判明な知覚が「私の知覚」として形成される、ということを示すより積極的な根拠を挙げよう。実際、MR においては、純粋記憶力によって蓄えられた過去の記憶――これは「人称的な」ものなのであった――について、自動的再認をなすには、そうした古い記憶の「現前」は、「意識的であれ潜伏的（latente）であれ…必要でもなく十分でもない」（MR236）[11] と言われる。さらには、自動的再認が念頭に置かれつつ、再認はある過去の記憶の「保存を含意するものではない」（MR237）とも言われる。なぜ MR においては、自動的再認において、純粋記憶力によって蓄えられた過去の記憶の現前ひいては保存までもが不要とされるかと言えば、自動的再認において「付随する運動」がすでに「習慣」へと組織され、運動メカニズムが「確固たる」ものである状態が念頭に置かれているからであろう。習慣化され、確固たるものとなった運動メカニズムは、「最初の衝撃」さえ与えられれば、全面的に揺り動かされ（cf. MR / MM84）、他の助けを借りずに「それ自体で機能することができる」ものなので「あった」。

それに対して、MM においては、自動的再認において、「純粋記憶力」によって蓄えられた過去の諸記憶は、「脇役」（MM107）を演じるとされる。自動的再認における過去の諸記憶の「脇役」としての働きがいかなるものであるのかについてははっきりとは述べられていないが、純粋に機械的な再認、すなわち運動メカニズムが完全に習慣化され完全に確固たるものとなっている状態が、我々人間にあっては事実上認められないものであるなら、運動メカニズムはいつでも完全には習慣化されていないと言え、1.1 において見た、運動メカニズムが習慣化されていない状態に

9　こうした状態は、「まったく運動的な記憶力の状態」（MM173）と言われる。運動的記憶力とは、運動メカニズムというかたちで過去を記録・再生する記憶力であったのであり、こうした状態においては運動的記憶力が純粋な仕方で働いているということである。

10　受けた刺激が有益な反作用によって直接的に引き継がれるような、まったく機械的な再認をなす存在は、「まったく純粋な現在に生きている」（MM170）とされる。それに対して、我々の自動的再認においては、生まれかけの反作用の局面が差し挟まれるがゆえに、外的対象に対して実際になされる反作用は、つねに遅延を孕んでいると言える。

11　「ある古いイマージュの現前は、意識的なものであれ、潜伏的なものであれ、類似した知覚の再認に、必要でもなく十分でもない」（MR236）。「古いイマージュ」とは過去の記憶のことであり、「類似した知覚の再認」とは自動的再認のことである。

おける、過去の諸記憶の「潜伏的介入」こそが、「脇役」としての過去の諸記憶の働きが意味するところであろう。つまり、自動的再認において、過去の諸記憶は、「不可視的ながらも現前して」、「意識の薄暗い深淵から」何らかの示唆を与えるという、一種の知的な働きをなしていると考えられるのである[12]。自動的再認の②における事態と照らし合わせると、こうした局面は、対象によって我々の側に引き起こされた生まれかけの反作用が対象の側へとフィードバックされることで、漠然としていた感覚的印象が図式化されて判明な知覚が形成され、そこにおいて対象を利用する方向性が認知されるという局面に対応していると言えるだろう[13]。

同じことを、運動的記憶力と純粋記憶力との関係という点から述べるなら、自動的再認においては、運動的記憶力の方が目立って働いているにしても、運動的記憶力がそれのみで純粋状態で働くということはなく[14]、純粋記憶力によって蓄えられた過去の諸記憶が「脇役」として参入しているのであって、つまり運動的記憶力と純粋記憶力とが協働していると言える[15]。

以上に見てきたように、MM において、純粋に機械的な再認がしりぞけられ、我々人間のなす自動的再認においては生まれかけの反作用の局面がつねに差し挟まれるのであって、その局面において、純粋記憶力によって蓄えられた過去の諸記憶が「脇役」としてつねに潜伏的に介入しているのであるなら、MM における自動的再認においては、「判明な知覚」は、その判明さが度を容れるものではあるにせよ[16]、つねに形成されていると言えるし、また、こうして形成される知覚は、この知覚の形成に介入している過去の諸記憶が「人称的な」ものである以上、「私の知覚」であると言うことが出来るだろう。このようなわけで、まずは自動的再認について、MR においてはそこにおける「知覚」の身分は積極的に規定されておらずなお不明瞭であったのに対して、MM においては、多少とも判明な知覚が「私の知覚」としてつねに形成されると考えられるようになったことが確認された。

２．２　注意的再認および「再認一般」に関して

ここまで主に自動的再認を扱ってきたが、生まれかけの反作用の局面において過去の諸記憶が

---

[12] なお、ここで潜伏的に介入してくる諸記憶は、（注意的記憶において投射されるような）個別化された諸記憶ではない。脇役としての諸記憶は、なお闇に留まっているものであって（cf. MM150, 157, 167）、「雲状の」「混沌とした集積」（MM185, 191）として「分かたれぬまま」（MM184）介入しにくるのである。

[13] 石井は、自動的再認における諸記憶の潜伏的介入について次のように述べている。「視覚的知覚を実際の運動によって完結させる習慣」において「過去のイマージュが何らかの役割を果たしているとすれば、それは、身体に「図式」を描き出すよう背後から促すことにあるだろう」（石井、前掲書、135-6 頁）。

[14] 註 9 を参照。MM において、自動的再認は、「とりわけ諸運動によってなされる」（MM107、強調引用者）とされる。

[15] 運動的記憶力が「たえず作用へと向かい、現在に座し、未来だけを見つめる」（MR / MM86）ものであるのに対して、「我々は、過去についての等しくまた対応するあるパースペクティブなしでは、未来に対して影響力をもつことがない」（MM67）。

[16] 実際、自動的再認の②の状態（中間的条件）から③の状態（極端な条件）へと移行するにつれて、「判明な知覚」のもつ判明さは減じていくのである。MM 一章において、知覚とは、我々に、それに対してどのような反作用をなすのかを問うものとされるが、「確固たる習慣（habitude stable）が一つ獲得される」と、「完全に用意された応答が問いを無用（inutile）にしてしまう」ことになるから、そのような習慣が「一つ獲得されるごとに…知覚はその要素が一つ減少する」（MM43）。それでも、MM においては、完全に機械的な再認が我々にあっては明確に否定されている以上、我々に対する「問い」がなくなってしまうことはないのである。

「脇役」としてつねに潜伏的に介入することで、感覚的印象が図式化されて、多少とも判明な「私の知覚」が形成される、という事情は、注意的再認においても同様である[17]。もちろん、注意的再認においては個別的諸記憶が図式へと投射されるという点において相違はある。注意的再認においては、有益な反作用は外的対象へと実際に返されることがなく、「生まれかけ」のまま留められることになるのであり、そのため図式化は、単に対象を有利に用いることのみを目指してなされるものではない。そうして、純粋記憶力によって蓄えられた過去の諸記憶は、注意的再認においては、「脇役」としての役目を果たした後、つまり図式が形成された後に、先行する段階において様々な仕方でもってまず形成された図式に入り込み[18]、知覚をますます判明にしていくという、「主役」（MM107）の役割を演じることになるわけである。とはいえ、後の段階においていかなる諸記憶が図式へと投射されることになろうとも、「判明な知覚」すなわち図式がまず形成される段階に限って言えば、過去の諸記憶が「脇役」としてつねに潜伏的に介入し、我々の側に引き起こされた生まれかけの反作用が対象の側へとフィードバックされることで、感覚的印象が図式化されて、多少とも判明な「私の知覚」が形成される、という仕組み自体は同様であると言えるのである。別の言い方をすれば、注意的再認においては、自動的再認とは対照的に、純粋記憶力によって蓄えられた諸記憶の方が「主役」として目立って働くことになるとはいえ、ここでもやはり、まずは二種類の記憶力が上で見たような仕方で協働しているということである[19]。

「判明な知覚」すなわち図式がまず形成される段階に限って言えば、と述べたが、実際、注意的再認について、MR から MM にかけて、「判明な知覚」すなわち図式がまず形成される段階――注意的再認の第一段階――と、そこで作られた図式へと過去の諸記憶が投射される段階――注意的再認の第二段階――とのあいだに明確な区別が設けられるようになり、したがって図式形成の段階がそれとして明確に画定されるようになったということに注目すべきである。この点については、図式に入り込むことになる諸記憶のあり方に着目することで確認することが出来る。MR においても MM においても、注意的再認の第二段階で過去の諸記憶が図式へと入り込むことにおいて、それまでは潜在的であった諸記憶は「アクチュアル化する」（MR / MM133 et passim）とされる。つまり、MM においては、過去の諸記憶が「脇役」として潜伏的に介入している状態においては、諸記憶は潜在的であるということになる。その上で、MR においては、諸記憶が潜在的である状態からそれらがアクチュアルとなった状態への移行が、単に漸進的なものと

---

17 注意的再認の機制について次のように言われる。「実際、外的知覚が我々の側に、それの大まかな輪郭を描く諸運動を引き起こすとすれば、我々の記憶力は、受け取られた知覚へ、…古い諸イマージュを導く」（MR / MM110-1）。引用の前半では図式形成について、後半では、注意的再認に特徴的な、諸記憶の投射について、それぞれ述べられている。

18 知覚に対してどのような記憶が投射されるかということは、様々な仕方でなされる図式化に対応している（cf. MR / MM135, MM188）。

19 「自動的再認がとりわけ諸運動によってなされる」のであるなら、「注意的再認もまた諸運動から出発する」（MM107）。再認一般において、運動的記憶力と純粋記憶力とは組み合わさって働いているのである（cf. MM169-70）。

して捉えられていたのであるが[20]、一方、MM においては、これら二つの状態は、きっぱりと区別されており、諸記憶が図式へと投射される以前の段階においてはそれらは「なお潜在的な状態に留まっている」（MM148）ということが強調されている[21]。要するに、MM においては、注意的再認において、図式への諸記憶の投射が未だなされておらず、図式が形成されただけという段階が、それとして画定されたわけである。なお、諸記憶のあり方についてのこうした変更以外にも、MR から MM にかけて、注意的再認における二段階のあいだの区別が明確化されたことを示す変更が幾つか見受けられる[22]。

このようなわけで、MM においては、自動的再認においても、注意的再認においても、つねに以下の事態が共通して認められる。すなわち、私が外的対象から感覚的印象を受けると、生まれかけの反作用の局面が差し挟まれて、この局面において、過去の諸記憶が「脇役」として潜伏的に介入し、感覚的印象が図式化されて、多少とも判明な知覚が「私の知覚」として形成される、ということである。このように、MM においては、「私の知覚」の最初の形成の局面すなわち図式化の局面が、自動的再認においても注意的再認においても、つまりは「再認一般」において、画定されるようになったのである。こうした事情ゆえに、MR から MM にかけて、「再認一般」と「自動的再認」及び「注意的再認」を巡って、節の区分の仕方が変更されたと考えられる。MR においては、町を歩く例の記述をはじめ、自動的再認について述べられているパートには、「再認と不注意（inattention）」というランニングタイトルが冠されているのであって[23]、「注意」と「不注意」とは再認の二つの排他的・対立的なジャンルであるとされる（cf. MR237）。一方、MM においては、自動的再認についてのパートは、「再認一般について」と題された節に繰り込まれているのである。つまり MM においては、自動的再認において認められる「私の知覚」の形成が、再認一般において基礎的に認められることが肯定されているということである。

結論

以上の考察を通じて示されたのは、次のことである。すなわち、我々が感覚的印象を受けると、

---

20 記憶を潜在的な状態から知覚へと向かわせる流れは、この流れが実際に知覚に入り込むことなく「そのまま放任されると、その流れが強まるにつれてますますアクチュアルとなる、あるアクチュアルな記憶をしか与えないだろう」（MR396）とされる。要するに、MR においては、記憶が実際に図式へと入り込むことがなくとも、記憶はすでにアクチュアルなものとして想定されてしまっているのである。なお MM においては、この同じ流れが実際に知覚に入り込むことなく「放任された」場合に認められるのは、あくまでアクチュアル化への「傾向」（MM142）であるというふうに変更されている。

21 「ある記憶をふたたび見出す…場合、…我々は現在から自らを引き離し、はじめに過去一般に身を置き直し、次いで過去のある特定の領域に身を置き直す。それは試行錯誤的な働きであり、写真機の焦点合わせにも似ている。しかし我々の記憶はなお潜在的な状態に留まっている。我々はこのようにしてただ、適切な態度を取りながら、記憶を受け入れる準備をするだけである」（MM148、強調引用者）。なお、我々が「記憶を受け入れる」というのは、図式へと記憶を投射するということである。

22 一例を挙げると、注意的再認の機制について、MR においては、「完全な視覚的知覚は、そこにおいて我々が我々の諸イマージュを投射するところの半－自動的な運動過程を含む」（MR380）とされていた箇所が、MM においては、「視覚的再認は、まずは半－自動的な運動過程を含み、ついで対応する諸態度のうちに差し挟まれる諸記憶の能動的な投射を含む」（MM119、強調引用者）と変更されている。

23 MR においては、「再認一般について」と題された節は、「結局、再認とは何であるか」（MR / MM100）という問題提起で切り上げられており、その後に「再認と不注意」の節が続く。

反作用が生まれかけである状態が挿入されて、この局面において、過去の諸記憶が潜伏的に介入し、対象の感覚的印象が強調・補完されて、多少とも判明な知覚が「私の知覚」として形成されるという事態が、MR から MM にかけて、再認一般において基礎的に認められるものとして、明確に規定されたということである。純粋記憶力の働きという点から見れば、純粋記憶力は再認において、程度の差はあるにせよ、いつでも、「直接的知覚の基底を諸記憶のクロス（nappe）で覆う」（MM31）べく、この直接的知覚の基底を、つまり「我々の感官の直接的で現在的な所与」である感覚的印象を、まず捉えに行っている、あるいは「迎えに行って」いる（cf. MM188）のである[24]。

最後に、こうした局面が MM において一般的に画定されたことが MM の他の部分とどのように関わっているのかについて手短に言及しておこう。MM は MR のほかに、MM への統合にあたり施された修正が MR と比べて圧倒的に少ないもう一つヴァリアントをもつのであって、それは、MM の最終章である四章の初めから三分の二に当たる部分に対応する雑誌論文「知覚と物質」（以下 PM）である。そして PM においては、本稿において述べてきたのとは異なるもう一つの観点から「私の知覚」の形成が捉えられており、そこでは、「それ自体では数えきれないほどの諸瞬間に分かれるであろう」諸事物の諸瞬間を、「私の持続のただ一瞬間に収縮する」ことにおいて、「私の知覚」が形成されると述べられている（cf. MM233）。その上で、MM 一章において述べられる「純粋知覚」の規定に目を転じてみると、「純粋知覚」とは、「直接的知覚の基底を諸記憶のクロスで覆うかぎりでの記憶力と、多数の諸瞬間を収縮するかぎりでの記憶力」という「二つの形態のもとでの記憶力」[25] が「成り立たせる」、「諸事物についての我々の認識の主観的な側面」を、「無視する」ことで見出される知覚であるとされる（cf. MM31）。こうした事情を踏まえると、前者の形態のもとでの記憶力による「私の知覚」の形成が、MR から MM にかけて画定されたのは、一冊の書物としての MM の成立段階において、MR の記述を PM の記述と統合させたことと関係していると推測できるし、さらに「純粋知覚」なる概念も、こうした統合を通じて生まれたものと推測することができる。そこで、PM を MM に組み込む際に加えられた変更も考慮に入れつつ、後者の形態のもとでの記憶力の働きによる「私の知覚」の形成についても検討し、これら二つの形態のもとでの「私の知覚」の形成を包括的に検討することで、従来の研究が手をつけられずにいた、「純粋知覚」なる概念に至るまでのベルクソンの思考の足跡を、ひいては一冊の書物としての『物質と記憶』が成立していく過程を、辿ることが出来るのではないかと思われるのである。

（あまのえみり　哲学哲学史・博士後期課程）

---

[24] 純粋記憶力のこうした働きは、「並進（translation）」（MM188）と呼ばれる。

[25] 1.1 で述べた二種類の記憶力と混同してはならない。ここで言われているのはむしろ、記憶力の働き方を捉える二つの観点である。前者の形態は、諸事物に対する我々の精神の関わりを空間的な観点から捉えた場合のものと言えるし、後者の形態は、それを時間的な観点から捉えた場合のものと言えるだろう。

De la phase de formation de « ma perception » dans *Matière et mémoire* de Bergson — En comparaison avec la variante de son 2ème chapitre

Emiri AMANO

D'après Bergson, « ma perception » est en fait imprégnée de « mes souvenirs », et cependant la « perception pure » dans le 1er chapitre de *Matière et mémoire* (abrégeons MM) est la perception à l'état pur dépourvue de tel apport de mémoire. Il est donc essentiel, pour comprendre la conception de « perception pure » ainsi que la totalité de MM, de saisir comment se forme « ma perception ». Or, MM a une partie de ses sources dans un article qui correspond à son 2e chapitre, « Mémoire et reconnaissance » (abrégeons MR). Cet article a été paru quelques mois avant d'être intégré dans un livre et au moment de l'intégration Bergson a fait beaucoup de retouches à cet article. La conception de « ma perception » dans MM a été forgée, selon nous, au moment de l'intégration. Nous voulons donc éclaircir la phase de la formation de « ma perception » en effectuant une comparaison entre MR et MM.

Nous montrons d'abord qu'on peut classer la « reconnaissance » en deux types, c'est-à-dire la « reconnaissance automatique » et la « reconnaissance attentive » et qu'on peut distinguer encore deux types de la « reconnaissance automatique » selon que la formation de la « perception distincte » est utile ou non. La « perception distincte » est formée par la schématisation de l'impression sensorielle à travers la réaction *naissante*.

Nous montrons ensuite qu'au moment du passage de MR à MM la phase de la formation de « perception distincte » a acquis de l'importance et que cette phase est dans MM considérée comme le fond de la « reconnaissance en général » en tant que phase de la formation de « ma perception ».

Nous suggérons finalement la possibilité de poursuivre la piste de Bergson sur la formation de la conception de « perception pure » et aussi sur la formation de MM comme une totalité en profitant de ce que nous avons montré.

「キーワード」
ベルクソン、『物質と記憶』、記憶力、知覚、再認